

折に触れ 四字熟語

NO. 66 『臥薪嘗胆』 がしん しょうたん

< 意味 > 将来の成功を期して苦勞に耐えること。薪の上に寝て苦いきもをなめる意から。もとは敗戦の恥をすすぎ仇を討とうと、勞苦を自身に課して苦勞を重ねること。

< 出典 > 「史記」<越世家>

「……吳既赦越、越王勾踐反國。乃苦身焦思、置胆於坐、坐臥即仰胆。飲食亦嘗胆也。……」

読み下し：『吳はすでに越を赦し、越王勾踐、国に反る。すなわち身を苦しめ思を焦がし、胆を坐に置き、坐臥するにすなわち胆を仰ぐ。飲食にもまた胆を嘗む。』

通 釈：勾踐は許されて帰って以来、われとわが身を苦しめては復讐の念を新たにした。いつも傍らに干したキモをおいて、起き臥しのたびに手を取り、食事のたびにその苦さを味わった。

< 出典 > 「十八史略」<春秋戦国>

「……夫差志復讐。朝夕臥薪中、……」

……勾踐反國、懸膽於坐臥、即仰膽嘗之曰、……」

読み下し：『……夫差讐を復せんと志す。朝夕薪中に臥し……」

……勾踐國に反り、膽を坐臥に懸ける、即ち膽を仰ぎ之を嘗めて曰く……』

通 釈：……勾踐は父の讐を報いようと志し、朝晩薪の中に寝起きして（身を苦しめ）、……」

……勾踐は国に帰り、苦い胆を寝起きする部屋に吊り下げておき、仰向いては胆を嘗め、……」

語 釈：「臥」はふし寝るの意。「薪」はたきぎ。「胆」は苦いきも。

一 言：中国の春秋時代、越王勾踐に父を討たれた呉王夫差が『臥薪』して一度は復讐を果たしたものの、勾踐の命を赦したばかりに、ついには逆に『嘗胆』した勾踐に復讐された、という故事から出た皆さんご存知の四字熟語です。

大相撲の初場所で優勝した栃ノ心の経歴と怪我による浮き沈みをテレビで見ながら、この四字熟語を思いました。意味合いはかなり違いますが、志が成就された背景には壮絶なドラマが隠されているものなのですね。

参照文献：徳間書店「史記」I 明治書院・新釈漢文大系「十八史略」上 三省堂「四字熟語辞典」